

奇妙な人

武田紀乃

今から百年ほど昔のある小さな村に、六郎という名の男がいました。

六郎は、髪結いの仕事をしながら一人で暮らしていました。そんなある日、仕事を終えて帰る六郎の姿が目撃されたのを最後に消えてしまったのです。近所に住んでいた者が家を訪ねても人がいる気配がないので村の人たちは、「六郎は、神隠しにあつたのだ。」と言って、恐れていました。

六郎の店の近くで、反物を売る仕事をしている、仲の良かった一蔵は、神隠しなど信じていなかったのに、六郎と同じ道を通つて帰れば何かわかるかもしれないと思ひ、同じ時刻に同じ道を通つて帰つてみました。道を半分も行かない辺りにある、深い森に差し掛かった時でした。突然、木の上から、

「生まれ。」

という、低くしゃがれた声が聞こえました。一蔵は、空耳だろうと思ひ、また歩き出すと、

「生まれと言つたのが聞こえなかったのか。こんな風になりたくなければ生まれ。」

という声がまた聞こえ、それと同時に重たいものが落ちてくるような音がしました。ふりむくと、手も足も首もばらばらになつた六郎が落ちてはありませんか。一蔵は、声にならない悲鳴をあげました。逃げたいのに足が動かないのです。それを最後に、一蔵は意識を失いました。それ以来、一蔵と六郎を見た者はいないということです。そして、不気味だからと引つ越す者や、二人の行方を探しに行つていなくなる者が後を絶たず、とうとう村には人がいなくなつてしまいました。

二十年ほどたちました。あの小さな村から引つ越して来た人が多く住む町に、奇妙な人が現れました。この人は、顔は男、両腕は女、両足は子供というように、ばらばら人間だったので。六郎を知っている者たちは、その人の姿を見て震えあがりました。なんとその顔は六郎のものでしたのです。